

■ 重要な構成要素の種類・区分 (2019年3月現在)

景観単位	種類	区分	件数
里山	樹木	天然生林	1
	山田	山田(馬ころがし)	1
段畑	公園・旧跡	旧石鐘神社	1
	石垣	石垣	1,537
	石切場	石取場	4
	野壺	野壺	2
	旧道・小道	山道(ヤスンバ道)	1
		山道(ナダ道)	1
		山道(ナカ道)	1
	貯水槽	神田畑	1
		防除水槽(ツエヌケ)	1
	主屋	主屋(平屋建)	12
集落		オリヤ養蚕	6
	付属屋	納屋	1
		ヘヤ	1
		桑納屋	1
		蔵	3
		家畜小屋	1
		養蚕小屋	4
		複合型付属小屋	2
		樋倉	1
	倉庫	みかん倉庫	1
	長屋門	長屋門	2
	社寺・石造物	春日神社(本殿・中殿・拝殿・透廊・石造物)	1
	社叢・緑地	春日神社社叢	2
	井戸	井戸	9
里海	河川・水路	普通河川南川	1
		普通河川河原川	1
	海岸線	魚つき保安林	1
	お旅所	お旅所	1



旧石鐘神社
鳥居は明治7年(1874)の建造で、尾道石工の名が刻まれています。



山田(馬ころがし)
江戸時代は谷沿いに山高く山田が造られ、巨大な石垣が築かれました。



春日神社と照葉樹林

春日神社・春日神社社叢

春日神社は本浦と枝浦を隔てる丘陵の東端部中腹にあります。創設沿革は不明で、16世紀半ばの再興と伝えられています。港に向かって建つ一の鳥居を抜け、参道の石段を上ると拝殿があり、拝殿後方の段上には中殿と本殿が続いています。本殿は間口九尺の間社流造。社叢は昔から保護されてきた自然林で、スダジイやクスノキなど、古い植生を示す照葉樹が残っています。

山道(ナカ道)
山を越えて他の集落に続く「カッテミチ」のひとつ。



山岳公園



長屋門
旧村役人宅のみに残る門で、納屋などの建物に門型の出入口を設けています。



みかん倉庫
みかんの貯蔵・選果・箱詰めのためにさまざまな倉庫が宅地や山裾に建てられています。



井戸
水源が乏しかった時代に、共同で水を得てきた狩浜の暮らしの痕跡です。



天然生林

狩浜の暮らしとの関わりを伝える天然生林が残っています。



宇和海狩浜の段畑と農漁村景観

愛媛県南西部に位置する狩浜は、宇和海に面するリアス海岸の入江の集落で、近世の狩浜浦を引き継いでいます。元は鰯漁を営む漁村でしたが、その浮き沈みを農業で補う中、甘藷や麦から糠、養蚕へと作物を転換してきました。現在はみかん栽培を主要な産業とし、漁業も入江の利点を生かした真珠養殖やシラス漁などが行われています。

当地では、近世の鰯漁と、近代の養蚕業の隆盛を通じて人口が増え、山腹に畑地を広げ、入江、居住地、段畑、山林が連なる壮大な景観が形成されてきました。急斜面に広がる段畑は、所々に露頭する石灰岩などを用いて農民が築いてきたものであり、幾段にも重なる灰白色の石垣がみかんの緑や橙に彩られて際立つ眺めをなしています。

このような景観は、春日神社の秋祭りが地域の結びつきを保ち、また、昭和50年頃から進められている有機農業がまちづくりへと繋がる中で維持されてきました。「うみ」「さと」「やま」の織り成す狩浜の景観は、日本の生活や生業の理解に欠くことのできないものとして、重要文化的景観に選定されています。

区域／愛媛県西予市明浜町狩浜の全域並びに共同漁業権の区域
面積／804.2ha(陸地451.7ha、海域352.5ha)
選定／平成31年2月26日



石垣(上)
狩浜の暮らしを支えてきた石垣は、江戸時代から代々築かれ、1537筆を数えます。

野壺(下)
クサラカシ(イワシなどを飼らせた魚肥)や下肥を一時的に段畑で保管したところ。



御旅所(おたびしょ)
春日神社の秋の大祭では「御旅所」が設けられ、練りが集落や海上を巡行します。

法花津湾(ほけつわん)

主屋・付属屋

明治期は平屋建ての主屋が建てられ、そこで養蚕も営まれていました。大正期から昭和の初めには居宅兼蚕室の二階建ての「オリヤ養蚕(ヨウザン)」や専用蚕室の「養蚕小屋(ヨウザンゴヤ)」が建てられました。納屋、ヘヤ(隠居屋)、桑納屋、蔵、家畜小屋、樋倉などが建てられ、これらを複合した複合型の付属小屋もみられます。どれも当時の暮らしを伝える重要な建物です。



明治期の平屋建ての主屋



オリヤ養蚕



養蚕小屋



魚つき保安林
かつら島は、江戸時代より「魚つき林」として保護されてきました。



別棟のヘヤ

重要文化的景観

宇和海狩浜の段畑と農漁村景観

Uwakai Karihama
Ehime Prefecture Seiyu City

本浦



枝浦

愛媛県西予市明浜町狩浜地区



かりえ笑学校
住民の地域づくり活動の拠点として、平成28年(2016)に旧狩江小学校が「かりえ笑学校」として再開しました。



西予市教育委員会 スポーツ・文化課

〒797-8501
愛媛県西予市宇和町卯之町三丁目434番地1
TEL 0894-62-6416 FAX 0894-62-6591

1) 地区の概要

西予市は愛媛県南西部に位置し、平成25年(2013)には、日本ジオパーク委員会によって、市全域が「四国西予ジオパーク」に認定されました。

明浜町狩浜地区は市の南西部にあり、宇和海海域の法花津湾(ほけつわん)に面しています。三方を山に囲まれ、春日神社がある丘陵の尾根を境に、本浦と枝浦の2つの集落があり、680人(平成30年8月現在)が暮らしています。水源が乏しく、しばしば夏に干害を受けてきましたが、地区が南側に開けていることから、海洋性の温暖な気候で、集落や耕地は日照が良く、柑橘栽培の産地になっています。

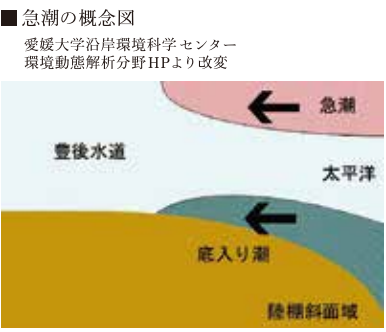
宇和海沿岸は「耕して天に至る」といわれる段々畑が発達した地域で、狩浜地区は見事な石灰岩の石垣が見られることで知られています。



狩浜地区全景

2) 宇和海の海況

豊後水道海域の宇和海は太平洋から黒潮が流れ込み、夏には、高温な水塊が流入する急潮(きゅうちょう)と低温で栄養豊富な水塊が海底を流れる底入り潮(そこいりしお)が発生し、生物の多様性を豊かにしています。また、リアス海岸であることから、波が低く、水深が深いため、沿岸漁業や養殖漁業に適しています。



3) 地質と仏像構造線

狩浜地区の地質は、仏像構造線を境に南部秩父帯と四万十帯があります。

南部秩父帯は、北側に厚層の層状チャート及び砂岩泥岩の分布が広くみられます。また、仏像構造線の付近では、石灰岩、緑色岩、チャートのブロックなどを含む泥質メランジュが分布しており、段畑がある山腹の所々には石灰岩の露頭がみられます。

四万十帯は、主に砂岩泥岩互層によって構成されていますが、仏像構造線付近では、断層運動によって地層が変形しています。



4) 石積みの石材

段畑の石垣の調査の結果、石積みには石灰岩、チャート、緑色岩などを使用していることがわかり、狩浜地区の特徴として石灰岩を比較的多く用いていることが明らかになりました。

段畑の上部はチャートや石灰岩を主とする南部秩父帯、段畑の下部は砂岩を主とする四万十帯で構成されています。

段畑の石垣の石材は、崩れにくい石灰岩やチャートが多く使用されています。

1) 藩政期の狩浜

狩浜の地名は、文明11年(1479)に書写された「八幡愚童記(はちまんぐどうき)」に「狩濱浦」として登場します。

藩政期には吉田藩の浦方となり、イワシ網漁業を生業としていました。捕ったイワシを浜辺で干し、上方などに出荷。藩の財政の一角を占めたといわれます。

耕作では、川や谷に沿って山頂付近まで棚田を開墾し、石垣で築いた水田で米をつくりました。斜面地では麦をつくり、18世紀半ばになると甘藷の栽培も始まります。19世紀には、換金作物として、藩が植栽培を奨励し、山林との境の斜面地に植が植えられました。



戦前頃の枝浦の稲作風景

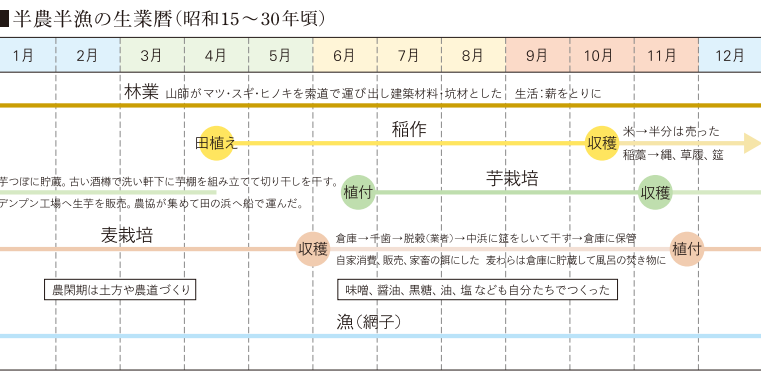
2) 明治期からの変遷

明治期にイワシ漁が不漁になると行商と養蚕が発展します。機械りの導入で「狩江篇」がつくれ、九州などに商いに行きました。養蚕は国家規模で奨励され、明治20年代から発展。植畑は桑畑になり、住居も養蚕に合わせて改築や改造が行われました。

しかし、養蚕が下火になり、桑畑は甘藷や麦の畑になります。昭和20年代に、再び、イワシ漁が豊漁になると、屋は畑仕事、夜はイワシ漁という半農半漁の暮らしをしていました。昭和30年代には、また、イワシ漁が不漁になり、シラス漁や真珠養殖に転換します。段畑では柑橘の栽培が盛んになっていきました。



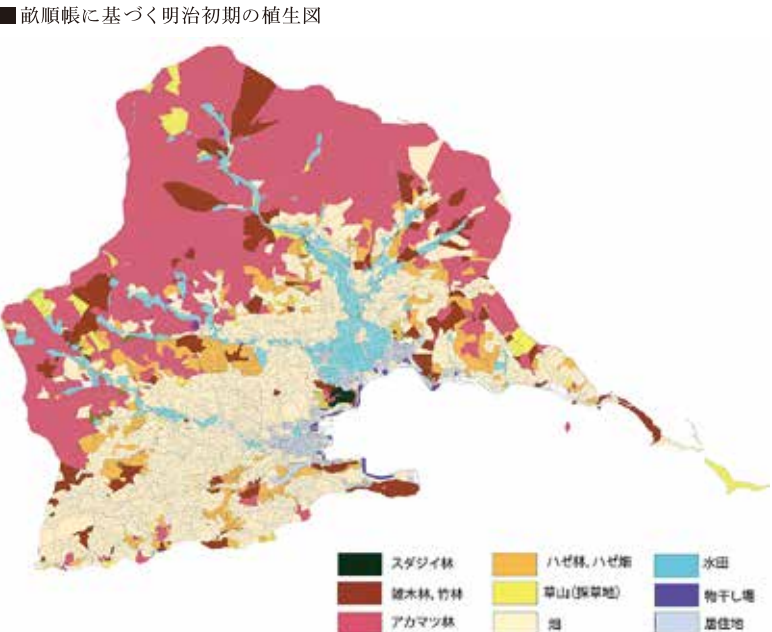
昭和40年頃の春日神社祭礼



1) 植生と暮らし

狩浜地区の山は、かつて、アカマツが広がる「松山」で、「草山」「雑木山」「雑竹山」が部分的に点在し、川沿いには棚田がつくられていました。松は漁火や燃料として、シュロは縄や牛鬼の材料として、竹は道具などの部材として使われ、山は暮らしに密接していました。

また、蠟燭の採取に向けて、植栽培が奨励されると、山斜面を利用して植が植えられ、「松山」の下に「植山」や「植畑」がありました。



3) 石垣の造り

狩浜地区の石垣は数百年かけて築かれ、いまでも昔の石積みが残っています。近世の頃、水田だった段畑には布積みの石垣がみられます。また、斜面の地形を利用して割石を積み上げた簡素な石垣はムカシインガキといわれ、古い石積みとして伝承されています。



水田であった布積みの石垣



ムカシインガキ



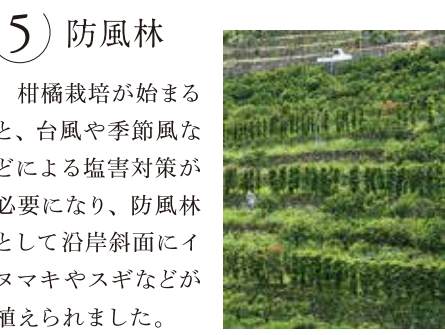
鏡積みの石垣

4) カッチミチとコミチ

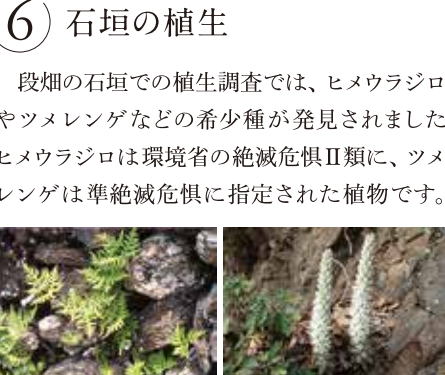
農道が整備されるまでは、段畑間の石敷きなどが主な道でした。集落から畑に向かう共通路は「カッチミチ」、畑内の道は「コミチ」と呼ばれ、「カッチミチ」には山を越えて往還する3本の幹線があり、「ナダミチ」「ナカミチ」「ヤスンバミチ」と呼ばれました。



水路沿いの石段



イヌマキの防風林



ヒメウラジロ

ツメレンゲ

1) 建物の特徴と構成

狩浜地区には、伝統的な主屋、ヘヤ(厩屋)、付属屋の建築が多数残っています。

主屋は、明治期に平屋建ての瓦葺きが主流になり、大正期から昭和の初めには「オリア養蚕」と呼ばれる木造二階建ての居宅兼蚕室も建てられました。

付属小屋は、狩浜地区の生業の変化を伝える、養蚕小屋、桑納屋、機屋、植倉、イリコ納屋、みかん倉庫など、多様なものがみられるのも特徴です。

また、ヘヤ・蔵・納屋などの機能を組み合わせて1棟で建てる複合型の付属小屋がみられます。

納屋には樽を置き、その中でイワシなどを腐らせ、クサラカシと呼ばれる魚肥をつくっていました。

2) 水と暮らし

狩浜地区では、簡易水道が数かれる昭和27年(1952)までは、主に井戸水を飲料水に、川や海の水を生活用水としていました。

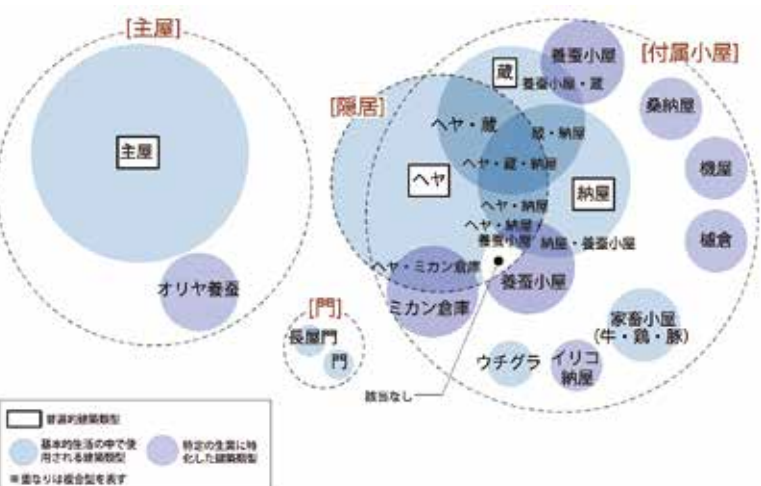
井戸や洗い場に降る石段などが現在も残っています。



上/南川の洗い場

下/屋敷内井戸(糞管)

■狩浜の建物の種類と構成



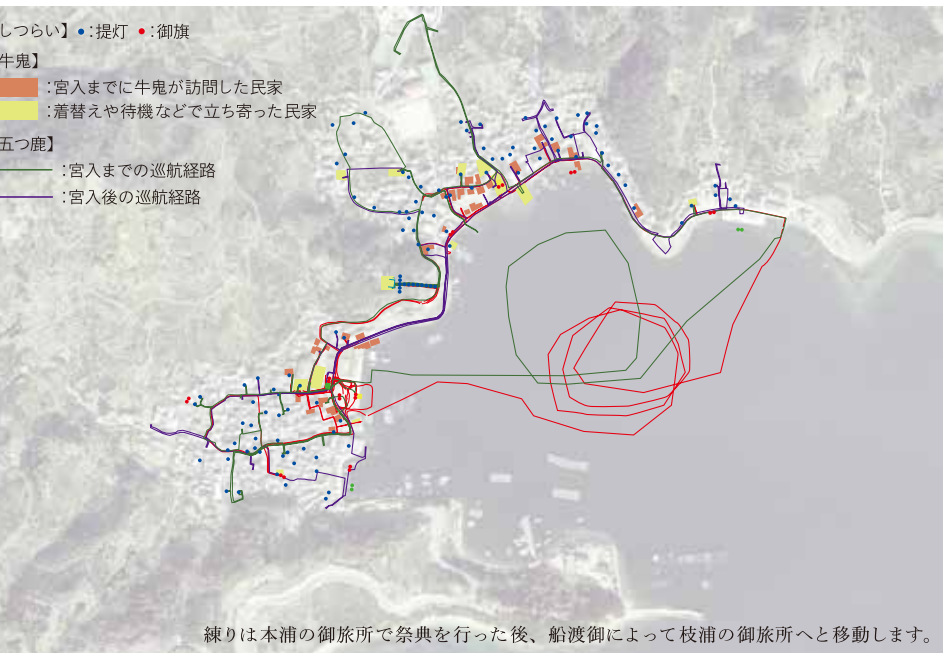
3) 狩浜の秋祭り

毎年10月第4土曜日に、春日神社の秋の大祭が行われ、さまざまな練りの巡行など、近世から伝わる祭礼文化を住民が結束して継承しています。家々には提灯などが飾られ、入江に面した場所には御旅所(おたびしょ)が設けられます。



御旅所と牛鬼

■練りの巡行経路



4) 練り

神輿、太神楽、角力練り、巫女の舞、五つ鹿、御船、牛鬼、俄の練りが登場し、種類の豊富さは愛媛県内でも際立つほど。各々の担当を地区ごとに決めて継承しています。



1.五つ鹿 2.神輿
3.御船組 4.巫女の舞 5.角力練り